

小泉八雲を知る旅



第4回 時代背景を整理しよう

旅に出て間もないですが、ここで時代背景を整理しておきましょう。今回は八雲の日本帰化までの世相などを整理。現時点の朝ドラ『風、薫る』との同時性・関連性も意識しながらまとめてみました。

●1850年八雲誕生。1853年クリミア戦争勃発（～56年）。——ロシア帝国と、オスマン帝国・フランス・イギリス・サルデーニャの連合軍との間で行われたクリミア戦争。イギリス軍の軍医である八雲の父チャールズも、八雲が3歳の時、当時の赴任地から帰還した後この戦争に出兵。戦争終結の1856年は、両親の離婚が成立した年です。なお、ご存じのようにクリミア戦争では、ナイチンゲールが献身的に負傷兵の看護を行って衛生改革などを果たし、後に看護教育の確立など現代の医療・福祉の基礎を築く偉業を成し遂げました。

●1853年（嘉永6）ペリー日本来航。1868年（明治元）小泉セツ誕生。——ペリー来航後、日本は江戸幕府崩壊へと激動し、15年後に明治維新へ。セツの生誕は明治の幕開けの年でした。『ばけばけ』トキの祖父、勘右衛門（演者は小日向文世）は、明治になっても髷を落とさぬ侍スタイル。武士を没落させた張本人はペリーだと言わんばかりに、ヘブンに「ペリーめ！」と凄んでは可笑しみを醸していましたね。

●1883年（明治16）「鹿鳴館」開館。お雇い外国人も多数。——文明開化の象徴、鹿鳴館。日本の近代化（西洋化）をアピールし、欧米諸国との不平等条約を改正する目的で建てられた政府の迎賓館・社交場です。そこで「華」と称された女性の中には、大山捨松（後の元老・大山巖の妻）や陸奥亮子（外交官・陸奥宗光の妻）など美しく聡明な女性がいました。一方、幕末から明治にかけて、欧米の技術・学問・制度を導入して「殖産興業」と「富国強兵」を推し進めるため、日本政府や各府県は多くの人材をお雇い外国人として雇用。八雲もその一人として松江で教師になるわけです。

●1890年（明治23）八雲来日。1894年（明治27）日清戦争開戦（～95年）。——八雲は40歳で来日し、翌年1891年にはセツと共に松江から熊本に移り、長男が誕生。その後、神戸、東京へと移転します。神戸時代には日清戦争が勃発。近代化を進める日本が大陸進出の野望を抱いて、当時アジア最大の軍事大国であった清に挑んだ戦争でした。これに勝利し、国民も熱狂した日本。この後、東アジアにおける帝国主義的な軍事大国へと驀進します。

●1896年（明治29）八雲日本帰化。——『ばけばけ』では熊本時代の時代描写として、まさに“軍靴（ぐんか）が響く”映像をナレーションなしで映し出し、戦争が迫っている不穏な気配や国家の軍国主義化を演出していました。そんな中でセツの戸籍に入籍し日本に帰化した八雲。家長としての責任を果たすためとはいえ、心中穏やかではなかったと思われます。日本古来の精神や美徳を破壊することを深く危惧し、熊本での講演「極東の将来」などで、日本は武力に頼る軍国主義へ傾倒するのではなく、科学や産業の競争力で発展すべきだと主張。また、松江を去る際も、時局を見据えた上で生徒たちに、国のために死ぬのではなく国のために生きる道を説いています。

SIDE STORY

トキは、りんと直美より3つ年下

『風、薫る』は、1882年（明治15）、17歳のヒロイン・りんが暮らす栃木から始まりました。東京で暮らすもう一人のヒロイン・直美も17歳。明治15年といえば、『ばけばけ』のトキは14歳、ヘブンは32歳（ドラマで年齢がはっきりと話題になった記憶はないのですが、史実はそうです）。つまり、りんと直美はトキより3つお姉さん。3人とも同世代なんですね。

で、りんと直美が「看護婦見習い」として頑張る中、シマケンが書いた夕凧（紙面上では夕顔）心中事件の記事は、1888年（明治21）4月13日金曜日（画像を拡大して確認した、朝ドラ愛溢れる人のX<旧ツイッター>より）。トキとヘブンが出会うのはその2年後です。また、ナイチンゲールが奮闘したクリミア戦争が終わって35年経っており、その精神や実践ノウハウは世界に広まっていたということ。バーンズ先生もヘブン同様、お雇い外国人なのでしょうね。

なんだかややこしいことを書いてすみません。ただ、同じ時代を描きながら、ドラマによって、ずいぶん異なるものだと思います。『ばけばけ』は、没落土族という時代背景はあったものの、トキとヘブンの愛や家族の何でもない日常を面白おかしく描いたドラマ。『風、薫る』は、朝ドラでよくある日本初の道を切り拓く女性をヒロインに、その努力と苦悩や喜び、そして、朝ドラお決まりの家族愛や仲間との友情などを描くドラマ。舞台も、特に古き良き風情が残る、地方の松江と、近代化の最先端、東京ですものね。

そういえば、『風、薫る』の脚本家によると、りんの幼なじみの虎太郎も、文明開化の中で志を持って未踏の道を開拓していった彼女たち同様、明治を象徴する人物として描く予定だそうです。すでに再会し、すっかり都会人の風貌で社会での上昇志向を語っていましたが、この先の展開やいかに。

この脚本家曰く、「明治時代は自己責任論が興隆した時代」だそうです。「明治維新でドラスティックな改革が起きて、江戸時代には選べなかった自分の人生を選べるようになった。でも、その人生を選んだのは自己責任だということ、出世できないのは努力不足だと見なされ、そのような立場の弱い人に対して厳しい人が増えた」ということです。

こういう日本の風潮を、八雲はどう思っていたでしょう。彼自身は、運命に翻弄されながらも自分で自分の道を切り開いていった人です。が、時代に乗り遅れた落伍者であるトキの家族（実家と養家）を丸ごと引き受け、経済的に支え、仲良く暮らしています。

なお、言うまでもなく、『風、薫る』のヒロイン二人やバーンズ先生にもモデルになった人物はいます。が、NHKは、その史実を「モチーフ」にしたドラマとし、『ばけばけ』は「モデル」としたドラマ、と位置付けています。要するに「モチーフ」の方が史実から離れた創作部分の自由度が広いドラマだそう。もっとも『ばけばけ』だって創作部分が多いな〜と、史実を調べ出した私は思ったものです。でも、そこがドラマの見どころであり、制作陣の腕の見せどころなのでしょうね。